

# AFFORDING FACADE ～記号の解体と「主観価値」の栽培～

「麻の葉」文様の薄型鋼板メッシュを有機的なシェル状に造形し、建物をウェールのように包む医療施設のファサード。

幾何学パターンの反復と三次元形状が観察者の五感に多様な認知を誘発し、意味を固定化させない「動的なアフーダンス」をデザインした。

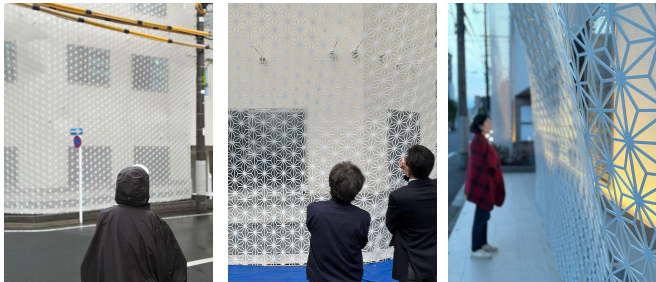
伝統文様による無病息災の象徴性と、知覚システムが生み出す変容性を両立することで、単なる外装を超え、訪れる人に絶えず新たな価値を提示し続ける多義的な風景を創出する。

視覚へのアプローチにより、可視化されないもの(主観・意味)の価値を現象させる試みである。



## 1) 建物の象徴や内面を表現する従来のファサードではなく。

このファサードは、最初から何かしらの意味を表現するわけではない。通りがかった人、訪れた人たちの意識に様々なイメージが立ち上がる「連想を促すキャンパス」のようなものを目指した。多様な感覚(主観)を誘発する装置としてのファサード。価値とは、物体そのものだけではなく物体を通して立ち上げる意味とともに在ることを伝えたい。

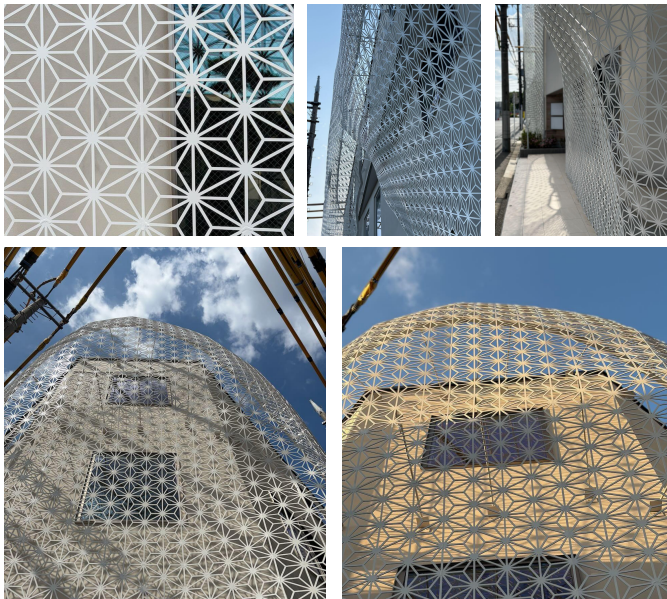


## 2) 過剰反復・錯覚・予測誤差による記号の解体。

無病息災や子どもの成長という「記号」を有する「麻の葉」をファサードの構成要素として用いて、医療施設のメタファーを現しながら、その強い幾何学性の過剰反復によるパターンが脳の予測符号化を裏切るという認知機能のゆらぎによって、錯覚という予測誤差が多様に立ち上がることを意図している。

また、ファサード自体は平面パネルを組み合わせた多面体でできているのだが、この予測符号化の特性により有機的な曲面にしか認知できないという意識の曖昧性への気づきへのアプローチも意図した。

ファサードの全体と部分との各所に、脳が「かたち」をイメージするためのプロセスを揺さぶる「認知の隙間」があることで、固定した認知がゆらぎ、連想が促される「しくみ」を考えた。



## 3) 地と図の反転～照明による認知の編集。

ファサードを表面的に照らすのではなく建物側の壁面を照らす構成とすることで、その柔らかな反射光が陰影をつくりだす。その陰影によって間接的に浮かび上がる存在感を表現した。麻の葉文様をファサードというシェードの網目と見立て、透過する優しい光が周囲をほかに照らす。この手法により、意識を麻の葉という主体(図)から光(地)へずらすという認知の編集を起こしている。この「地と図の反転」という編集もまた、脳の予測誤差に対するアプローチである。

また、日没から深夜、日の出の経過に合わせて光量を抑え、色温度を下げていくことで、夕方以降の帰路を導く行灯のようにやさしく迎え入れてくれる光を目指した。住宅街に馴染むようなライティング計画でもある。

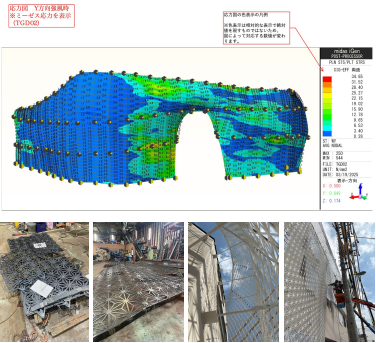


## 4) 構造と施工～諸技術の融合

一般的にこのようなファサードは「裏側に骨組みを施した化粧パネル」によって構築されるが、このファサードはファサード自体が構造体となっている点で画期的である。その実現には麻の葉文様の特性に加え、緻密な構造解析と定量化できない職人技のセッション、そしてそれを実現するために必要だったパタンナーの役割を果たすプログラム開発という3分野の技術の融合による。

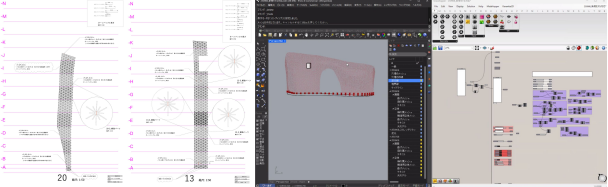
麻の葉文様は「シュタイナーツリー」という応力伝達パスを内在する正三角形で構成されている。この等方性のある非常に安定した幾何学形状かつ開口部面積66.51%という高い透過性によって大幅な風荷重の低減が可能となり、形態的には恣意的で不合理な有機的形態でありながら厚さ4.5mmという極薄鋼板のメッシュシェル構造が実現した。

鉄という素材には、曲げによる誤差、熱による歪み、溶接による引き込みなど、その加工過程において原理的に回避不可能な「ぶれ」が出るため、寸法通りに繋ぐと、その「ぶれ」が累積し大きな「ずれ」となる。その数値化できない領域を鍛冶屋の馴染ませ力によって実現している。



## 5) パタンナーの役割

これまでの建築業界には、アパレル業界におけるパタンナー的な役割を担う専門領域がなかった。そのため当初のイメージは、想定外の補強・補助材によって実物との乖離を生ずるが、今回その乖離をクリアするプログラムを開発することでイメージと実物の乖離を無くすことに成功している。



## 4) このファサードによって、ぼくがめざすこと

ニーズを満たす「手段としてのファサード」ではなく、この主観価値から新たなアクションが生まれるための「依代としてのファサード」。

このアフーディング・ファサードは、そのような価値の土壌であり、飽和した合理主義をゆるめ、そして一歩先に進めるための批評的実践である。物事の価値は一回きりの「消費」ではない。自らの認知に制限をかけずに関わり続けることで、豊かに育っていくものである。それをぼくは、「主観価値の栽培」というメタファーで伝えたい。

アフーダンスは、固定されたものではなく、主体との「相互作用」によって動的に変化するもの。それは「正解の獲得」ではなく、「視念の獲得」。体験が編集され、新しい視点という認知ツールを手に入れて、価値は育っていく。

このアフーディング・ファサード／主観価値の栽培とは、アートと建築の融合、建築の芸術的体験による価値の創成装置のようなものでもある。